

## 1. 研究概要

本リサーチセンターは、公益財団法人イオン環境財団と早稲田大学が、時代に即した環境課題の解決を目指すため設立した。当リサーチセンターは、双方のこれまでの経験や知見、学術研究を結合し、環境をはじめとした地域課題対応や人材育成など新たな価値を創造することで、持続可能な社会の実現をめざしていくものである。

学術研究に基づく持続的な地域社会のあるべき姿を「イオンの里山」と位置づけ、そのモデル構築を目指すと同時に、AEON People と本学の学生、卒業生が共に学ぶ「共育」を通じて、「次の社会に貢献する人材」を育成する。

本年度は「イオンの里山」の類型化に取り組んだ。

## 2. 4つの里山の類型とあるべき姿の明確化

研究の背景として述べたように、イオンは30年以上「イオンの森づくりプログラム」を継続実施してきた。そして今後は、この蓄積を活かし、更に拡張する「新しい里山の大循環」を創るという構想である。そこで、調査を踏まえ我々は、その里山の機能を以下の4つに類型化し、各々のモデル化を課題とするプロジェクトを積み重ねることが、プログラムの構造であると分析した。詳細を以下に述べる。

- ①豊かな自然環境を守り育む里山
- ②被災地の地域再生に資する里山
- ③地域のなりわいを育む里山
- ④都市生活を再構築する里山

従来の木を植えるというCSR的な発想だけでなく、地域の発展にどう位置づけるかというCSV的な発想に切り替えていくというものである。

従来、「イオンの森」では、宮崎県の綾町や、長崎県南島原市での森林の再生林や、牧場跡地の植林による水源涵養の森づくりなどの事例にあるように、広葉樹の植樹を中心とした二次林の再生に取り組んできた。

ここに、「人と自然が関わりを持つ緩衝地域、生活の場」という、いわゆる狭義の里山を構築し、“①豊かな自然環境を守り育む里山”モデルを構築しようとしてきたわけである。4章にて述べた通り、一方で、被災地における植樹も「イオンの森」と位置づけ、東日本大震災の津波被災地や、地震による土砂崩れ被災地の再生林にも取り組んできている。これらの森づくりの中には、祈念公園整備などの目的で行われるものも含まれ、自然環境保全と言うより、被災地域の地域再生に貢献するという意味合いが大きいものがある。木を植えるという行為に、記憶と教訓を次世代に伝えるという意味を持たせ、森の成長を地域の再生の象徴として捉える。加えて、植樹プロジェクトへの参加をきっかけに、参加者が地域とのつながりを持ち、関係人口となるような絆の象徴として捉えている。“②被災地の地域再生に資する里山”モデルということになる。これらについて、従来はCSR的な木を植えるという目的意識で、プログラムの整合がとられてきた。

一方で、CSV的な転換を図るとき、その価値の明確化を行い、プログラムのプロファイリングマネジメントを行う必要がある。本研究で昨年度行った自治体アンケートにおいて、“①豊かな自然環境を守り育む里山”という観点においては、里山の荒廃が見られ、その森の恵みを活かしたマネジメントが必要とされていることがわかる。つまり“③地域のなりわいを育む里山”という機能が求められる。そうした機能拡張においては、自然災害の脅威からの防災・減災に期待する声も大きく、前述の“②被災地の地域再生に資する里山”との親和性が良くなる。

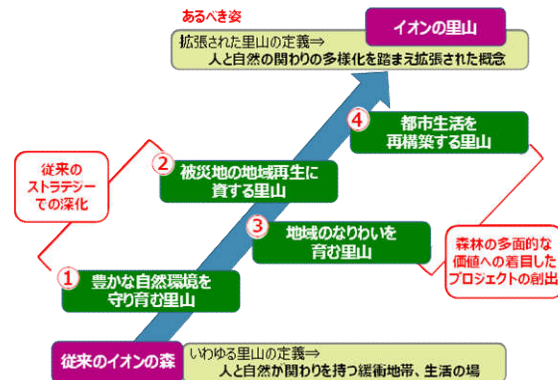
一方で、小売業であるイオングループが行うCSV事業としては、消費行動や商品開発などを通じた地域の持続性の確保も植樹と併せて期待する声が大きかった。森林・里山には多様な機能があるが、これらを現代社会のニーズに合わせた関係の再構築や都市の持続性が求められる。これらを同様な里山モデルとして表現し“④都市生活を再構築する里山”モデルと称することにする。

## 3. 里山類型と「あるべき姿」の関係

これらの4つの里山のモデルを図5-1に表現するが、それぞれのモデルづくりを行う複数のプログラムを独立して行うことで、それぞれの価値を明確に創出し、ステップアップし、最終的には「あるべき姿」としての「イオンの里山」を導き出すというものである。

バックキャストイングとして考えると、「イオンの里山」という理想型は、人と自然の関わりの多様化を踏まえ拡張された概念であり、社会デザインのきっかけとなる里山をめざすものである。このための価値創出として必要とされるモデル化のプロジェクトを計画し、これらが4つの価値を順次創出するモデル構築のプログラムであると整理できる。

新しいコモンズの創出とは、共有価値そのものの創出であり、これらの価値創出のプラットフォームで、“持続可能な様式で利用・管理・維持するためのルール、制度や組織が形作られる”ことと言えるであろう。



## 4. 今後の研究の方向性 ～価値指標マネジメント～

こうした、多様な里山の機能が社会の持続可能性には必要であり、その機能の重要度が認知されていることから、プログラム・プロジェクトの成果を測る価値指標も、本来であれば、木を植えた本数ではなく、そのプロジェクトが生み出した価値の質に基づく指標でなければいけない。価値指標マネジメントにおいては、価値は何であるかを認識し、それを定量的に測る指標を設定し、これをマネジメントする必要がある。

なお、各類型の成果評価はアウトプット指標が活用され、あるべき姿の「イオンの里山」の実現度の成果評価については、そのめざす姿の多様性からも、アウトカム指標の総和が重視される想定である。なお、評価指標に関しての数値化は今後の課題となる。

## 引用文献

環境保全活動を通じた地域の共通価値「コモンズ」の創出, 国際 P2M 学会研究発表大会予稿集, 春季, pp259-278, (2022), 山本百合子, 永井祐二, 岡田久典, 中川唯, 山崎晃